

キリ「玉植苗」の開発経緯と小型化

○大竹由起

【はじめに】

当センターでは、種子から育て、地上部を切り取った大型ポット苗である「玉植苗（図-1）」を開発した（研究期間：平成27年度～令和元年度）。玉植苗の特徴を広く周知し活用を促進するため、今回は玉植苗の開発経緯やメリットを紹介する。また、普及の過程で明らかになった労務負担の課題を解決するための小型化の検討について併せて報告する。

【玉植苗の開発経緯】

本県では会津地方を中心にキリが栽培されてきたが、キリ苗の生産者が減少して苗の入手が困難となり、既存の植栽地では病気の蔓延が課題となっていた。従来の苗畑で行うキリ苗生産には、除草・施肥等の管理や出荷時の掘り取り等の労務負担が大きい点が課題があったことから、当センターでは令和元年度に玉植苗を開発した。玉植苗は、ビニールハウス等の施設を利用して育苗するため集約的な管理が可能であり、従来の方法に比べて苗木生産に関わる労務負担が少なく生産しやすい。また、種子から育てる方法を採用したことにより、従来の主流であった分根苗（短く切った根から育てた苗）と比べて苗木が親木の病気を引き継ぎにくいなどのメリットがある。

玉植苗は、根株だけを植栽するため1年目の雪囲い（獣害対策等）は不要であり、初期成長が良好で直材生産に役立つ（図-2）。令和元年度から令和3年度には、玉植苗生産者の育成や林業研究グループの結成（会津里山森林資源育成研究会）が行われ、複数の市町村で玉植苗が植栽された。普及が進む中で、大型ポット（外径40cm）を利用した玉植苗は初期成長が良好な一方で、根鉢サイズが18Lと大きいため出荷時の梱包、定植時の運搬等の労務負担が大きいという課題が明らかになった。

【玉植苗小型化の検討】

定植時の運搬時等の労務負担の軽減のため、初期成長を損なわずに玉植苗を小型化可能か検討した。これまでに、外径40cmのポットを利用した玉植苗は、外径22cmのポットを利用した玉植苗に比べ、定植1年後の樹高が良好となる（手代木 2022）ことが分かっているため、今回は外径30cmのポットの利用を検討した（図-3）。30cmポットと40cmポットで玉植苗を各12本作成し、うち3本は根の乾燥重量を測定、9本は試験地に定植し1年後の樹高を測定した。その結果、30cmポットを利用した場合は40cmポットを利用した場合に比べて根の乾燥重量は低い値となったが、定植1年後の樹高は劣らず、30cmポットにおいては根量の減少が定植1年後の樹高に与える影響は少ないと考えられた。



図-1 玉植苗



図-2 定植1年後の幹の様子



図-3 小型化の検討に利用したポット
左：外径40cm、右：外径30cm